



1992年秋の修了式にて

ク・C・ベイカー教授(現アメリカ、ラトガーズ大学教授)は、世界的に著名な言語学者で、影響力のある数々の著書・論文を世に送り出している人物である。私が現在の専門に鞍替えするきっかけとなったのは、ベイカー教授の九八年の著書であった。先生の研究・指導が、私の言語学観を形成したと言っても過言ではなく、まさに私のロール・モデルとなったのである。ベイカー教授以外にも、マギル大学の先生方にはさまざまな影響を受けており、それは私の初期の論文に色濃く映し出されている。「どこに身を置かか」の大切さを心底感じた留学であった。

### 今日の取り組み、留学の知的興奮を後輩に伝えていきたい

博士論文を終え、帰国してからもう一〇

年以上経つが、機会があるごとに国際学会にて研究発表を行い、「世界」との繋がりを断ち切らないように心がけている。昨年は、ワルシャワ大学とリスボン大学にて研究発表を行った。今もなお「ベイカー流」の言語学を目指しながらいっているが、師匠との距離はなかなか埋まらないのが現状である。最近では、言語理論において仮定されている音形のない要素(発音されない語や句)に関心を寄せており、研究成果の一端はInterPhases(Oxford Univ. Press)という新刊に収められることになっている。

勤務校では主に教養科目の英語を担当しているが、英語そのものを教えるのはもちろんのこと、学生たちには私が留学を通して学んだこと・体験したことを伝え、留学に関するアドバイスを行っている。アメリカの治安の問題からか、最近ではカナダへの留学を希望する学生が増えているようであり、特にそのような学生の支援をしていきたいと考えている。言語学関連の授業も本務校および非常勤先で受け持っているのだが、私が留学で感じた知的興奮をいかに多くの学生に感じてもらうか、これからも挑戦が続く。

# 中央公論 3月号 発売中! 900円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社  
TEL 03-3563-1431

## 特集 大失業時代の闇

徹底討論 聖域なき雇用危機 雨宮処凛・小杉礼子・城 繁幸・八代尚宏・鈴木謙介

新卒採用をめぐるエスカレートする茶番劇 大沢 仁

ためらいなき財政出動こそが問題を解決する P・クルーグマン

対談 次の総選挙で日本版ニューディール連合を提唱する  
中川秀直×田原総一郎

庶民生活を守る覚悟が  
自民・民主にはあるか  
太田昭宏

〈保存版治癒力ランキング〉 **がんで死ぬ県、治る県**

新連載 佐藤 優の新・帝国主義の時代 特集 日本語は亡びるのか 水村美苗/蓮實重彦/東 浩紀

# カナダ留学のインパクト

国際文化教育交流財団奨学生（一九九〇年度）  
九〇年筑波大学大学院教育研究科修士課程修了  
後、カナダ、マギル大学大学院言語学科留学。  
九二年同修士課程修了、カナダ政府奨学生。九  
六年同博士課程修了（PhD）、専修大学専任講  
師。九八年同助教授。二〇〇二年オランダ、ラ  
イデン大学言語学センター客員研究員。二〇〇  
四年より現職。

専修大学経営学部教授

中村政徳

なかむら まさのり



●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

こなし、レポートを書くには、睡眠時間を削るしか方法はなかった。おかげで、カナダでの最初の夏を迎える頃には、頬がこけるぐらいにやつれてしまった。

## 吸収の日々

二〇年ほど前、面接試験を受けるため、筑波の里から大手町の経団連会館へ電車に揺られて向かった。留学が懸かった面接で、大変緊張したのを今でも覚えている。振り返れば、あの時が私の人生の最大の転機であった。私の背中を後押しし、「世界」に送り出してくれた国際文化教育交流財団ならびに日本万国博覧会記念機構に対して、この場を借りて改めて深く感謝申し上げる。

## 苦難の一年

同財団奨学生応募資格に、「外国の大学または大学院に留学した経験がない」という項目があるが、私の場合、留学はおろか海外渡航もしたことはなかった。カナダという異国で生活する緊張感もさることなが

ら、アパート探しに始まり、住民登録、銀行口座開設、電話契約等々で、学期が始まる前にすっかり疲れてしまった。マイナス三〇度の冬も忍び寄っていた。

暮らしに慣れるのにも一苦労だったが、最初の一年間は、勉強に関しても苦勞の連続だった。マギル大学言語学科の修士課程に入学したのだが、いくつか学部の授業も履修しなければならなかった。自分なりに準備はしてきたつもりだったが、学部生に交じってノートを取り、宿題をし、一時間の筆記試験を受けるのは正直かなり辛かった。それと並行して大学院の授業があったが、こちらは授業参加とレポートによる評価だったので、なんとかなった。しかし、当初は要領を得ず、膨大なリーディングを

モントリオールのは夏は、日本の夏とは違い過ぎしやすい。極寒を耐え抜いた人々は、貴重な太陽を無駄にしてはなるまいと、思い思いに夏を謳歌する。「国際花火大会」「国際ジャズフェスティバル」「国際映画祭」等々の各種イベントは夏季に集中している。私も大学院の友人たちとビールを片手にジャズに聴き入ったり、映画を見に行ったりと、初めての長期休暇を満喫した。人間の適応力は意外と侮れず、この夏に境に留学生生活が苦しみから楽しみに一変した。留学二年目には、初めて国際学会で論文を発表することもできた。その後、博士課程に進むことになった。指導教官のマー